

〈現地報告〉

スリランカにおける ラージャパクサ政権の成立と内戦の激化

中 村 尚 司

は じ め に

2005年から07年にかけてさまざまな機会に、スリランカと南インドの社会経済問題に関連する現地調査を行ってきた。本稿は、その一環として試みたスリランカ民族紛争に関する調査を取りまとめたものである。この問題に関する調査を実施するにあたって、日本、スリランカおよびインドの政府機関、非政府組織（NGO）、研究機関に加えて調査地域の関係者から援助していただいた。その方がたの名前を掲げる紙幅はないが、その支援に心から感謝したい。調査に必要な研究費は、主として龍谷大学の学術研究高度推進事業 AFC2005-09年度「紛争解決と秩序・制度の構築に関する総合研究——アジア・アフリカの地平から」（研究代表者：長崎暢子教授）による。このほか、次の文部科学省の科学研究費の支援を得た。

- ① 基盤研究(B)2004-05年度「家事・介護労働者の国際移動——エスニシティ・ジェンダー・ケア労働の交差」（研究代表者：龍谷大学久場嬉子教授）
- ② 基盤研究(B)2004-06年度「文化の「実践」：スリランカ和平構築にむけた文化と経済の総合的復興支援の研究」（研究代表者：一橋大学足羽興志子教授）
- ③ 基盤研究(B)2006-07年度「南インド村落構造の変動：四半世紀後の再調査と GIS の応用研究」（研究代表者：東京大学水島司教授）

また、筆者が共同代表の一人である「アジア太平洋資料センター（PARC）」のジャフナ事業の調査も活用した。国際協力銀行からの受託調査“Rehabilitation & Development of the Fishing Community in Jaffna, Sri Lanka”の副産物でもある。2007年のインド往復渡航費は、Indian Council for Cultural Relations の支援を得た。この場を借りて、謝意を表明したい。言うまでもなく、この報告に述べられた事柄の文責は、すべて筆者にあることも付記しておく。

1 ラージャパクサ政権の成立と水利紛争

2005年11月の大統領選挙後、スリランカの内戦をめぐる状況は、複雑な要因や利害関係が絡み合い錯綜している。反政府の軍事勢力である「タミル・イーラム解放のトラ（LTTE）」が、タ

ミル系住民に対して、選挙ボイコットを呼びかけた。そのため、大統領選挙は、北東部に住むタミル人の投票行動が極めて不自由な環境で行われた。キリノッチ県のように投票率が0%の行政区もあり、バランスの取れた民意を反映したとはいいがたい。事実上、シンハラ民族の二大政党である「スリランカ自由党 (SLFP)」と「統一国民党 (UNP)」の候補者の間でのみ、激しく争われる選挙となった。タミル人やムスリム系住民は有権者であっても、国政の方向を決める選挙とは無縁とみなされがちである。

UNP のラニル・ヴィクラマシンハ候補は、2002年2月にLTTE と停戦協定を締結した首相である。タミル人の間で支持者が多い。選挙ボイコットの呼びかけに助けられて、シンハラ民族主義者である SLFP のマヒンダ・ラージャパクサ候補が、それを僅差で破り当選した。しかし、与党の SLFP だけでは議会の多数を占めることができず、少数党である「人民解放戦線 (JVP)」, 「シンハラ民族の遺産 (JHU)」, 「大衆統一戦線 (MEP)」などのシンハラ民族主義者の期待に応える必要がある。そればかりでなく、最大野党の UNP から20前後の国会議員に、大臣のポストや政治資金の提供を申し出て、政府与党への移籍を促した。

それと同時に、任期を終えたクマラトゥンガ前大統領が自分の弟アヌラを後継者にし、バンダーラナーヤカ家による統治を続ける企図に対抗策をとった。ラージャパクサ大統領は、アヌラ・バンダーラナーヤカ観光担当相をはじめ、前大統領に近い閣僚を政権中枢部から遠ざけ、実権を親族、とりわけ三人の実弟にゆだねる布陣を採用した。水利部門を担当するチャマル・ラージャパクサ灌溉相、軍事部門を担当するゴータバヤ・ラージャパクサ国防事務次官（国防相は大統領が兼任）と内政部門をバシル・ラージャパクサ大統領顧問である。中央銀行総裁など要職も、経歴を度外視して側近の支持者で固める人事を行っている。2007年の本稿執筆時点で、現政権における大臣の数は、閣外相や副大臣も含めて、総数107名に達している。しかし、「サンデー・リーダー」紙などの批判的な報道によれば、軍事戦略を含む公権力の行使も政府予算の執行も、7割から8割まで大統領を含む4名の兄弟が決めるといわれている。政府批判の報道機関に対して、ジャーナリストの暗殺、印刷工場の放火などの破壊活動が行われても、加害者が検挙されていない。新政権下の言論抑圧の特徴である。

この体制の下で、政府軍と LTTE 軍との軍事対決がエスカレートした。2006年7月下旬から8月初旬にかけて表面化した、両軍との武力対決は、水利をめぐる攻防戦という特徴を持つ。水利紛争は、この島の正史が記述する二千年来の大問題であるとともに、東部州の支配権をめぐる両陣営の利害がきわだつ場面でもある。とりわけ、戦場となったムットゥール地区は、ムスリム、タミル、シンハラ居住区が交錯するとともに、北部と南東部との LTTE 支配地区を結ぶ戦略上の要路である。LTTE 軍が支配するサンプルル地区からは、トリンコモリーの海軍基地、巨大な「プリマ」製粉所、「東京セメント」工場を容易に砲撃できる。

7月20日、LTTE 軍がマウシル・アール水系頭首工の水門を閉鎖した。LTTE によれば、タミル人居住区に飲料水さえ十分に供給されず、シンハラ入植農民にのみ配水されてきた、という積年の不満を表明するために行われた。この問題は、長い伝統を持つ水利慣行によって地域の個

別的な課題として解決することも可能であった。しかし、退役陸軍少将を東部州知事に任命した現ラージャパクサ政権は、「ノルウェーの和平努力を批判する JHU や JVP の主張を取り入れ、カルナ派の離脱や津波被害で弱体化した LTTE 軍を軍事的に制圧し、東部と北部の LTTE 支配地区を分断する目的で進められた」というのが前政権党である UNP の見方である。

政府軍は「市民生活を守るための限定的な侵攻」という大義名分を掲げて、空爆、地上軍の派遣に踏み切った。戦線はムトゥール半島全域に拡大し、いくつかの政府軍の拠点が LTTE 軍に占領され、かなり武器弾薬が奪われた。LTTE 軍も大きな打撃を受け、イサヤムダン中佐を含む32名の戦死者を出したと公表している。大規模な地上戦という停戦合意以後初めての作戦行動は、これまでのような散発的な衝突とは異なり、両軍の武力対決における新たな展開であり、その戦闘結果は両軍兵士の士気のみならず、スリランカ政局に大きな変化を生んだ。

国際的にも、大きな動きが続く。デンマークとフィンランドに続いて、スウェーデンが8月末に停戦監視団からの離脱を決定した。これを受けて、ノルウェーの Jon Hanssen-Bauer 特使がキリノッチを訪問し、停戦協定や国際監視団の再検討について協議した。インド国内では NGO や政治家の間に、武力衝突の拡大を座視すべきではない、という主張が拡がりつつある。

LTTE 軍は8月5日午前0時に撤退を開始し、停戦協定時に定めた支配地区に戻り、水門を開けることを決定した。しかし、政府軍は自力で水門のある地区を解放し、さらに軍事の要地であるサンプル地区の支配を目指して進軍を続けた。この間にフランスの NGO である AFC 職員17名（女性4名を含む16名のタミル人と1名のムスリム人）が床に伏せた状態で銃殺された。司法手続きを無視した処刑について、EU を中心に国際的な非難が高まっている。

この頃、筆者はインドに滞在していた。2006年8月9日、ニューデリーの官庁街、サウス・ブロックの外務省を訪問する。1980年代末にスリランカで、インド平和維持軍の政治顧問をしていたジャイシャンカル北米局長に会う。同局長がインド外務省のスリランカ政策の責任者である、モーハン・クマール南アジア局長を紹介してくれる。彼は、『インド・スリランカ関係資料集』5巻を後で送らしようと約束して、「スリランカの民族対立を軍事的に解決することはできない」という。しかし、4年間コロンボで公使をした経験から、「政府の一部と LTTE の指導部に軍事解決の幻想があり、非暴力的な解決の展望は悲観的だ」ともいう。インドにとっても対応に苦慮する事態だそうだ。この後、南インドで水利調査を行う計画だったが、コロンボへ飛ぶことにした。ジャフナに事務所を持つ NGO の共同代表として、住民支援に何ができるか模索するためである。

新政権誕生後、コロンボでは陸軍の最高幹部が自爆攻撃を受けたり、空軍機を供給し軍事訓練を行っていると言われるパーキスタン大使（前諜報機関長）が、ヴェトナム戦争で開発されたクレマイン（攻撃用地雷）による攻撃を受けたりして、不穏な事態が続いた。他方、東部州における戦闘激化に呼応した形で、LTTE 軍は北部のジャフナ半島の一円支配を目指し、ナーガルコーヴィル、ムハマライ、キラリの政府軍基地への攻撃を開始した。LTTE 女性兵士の無残な死体写真が、コロンボの新聞に大きく掲載され、最前線へ関心を高めた。

双方の陸海軍はともに、この間の戦闘を通じて、敵側の戦死者と戦傷者が自軍よりはるかに大きい、という戦果を発表している。実際に最も多くの死傷者を出し、家屋を破壊され、難民化したのは地域住民大衆である。漁船などに乗って南インドの海浜に来るスリランカ・タミル人の難民が急増した。タミル・ナードゥ州の NGO が、これらの難民に仮住まい、食糧などの生活必需品を提供している。

タミル・ナードゥ州のカルナーニディ政権は連邦政府の与党でもあり、LTTE 支持を表明している Vaiko 議員などとは一線を画している。しかし、難民支援の負担が急増している現況を打開するよう、デリーのマンモハン・シン首相に強く要請している。2006年9月にキューバの首都ハバナで開催された非同盟国首脳会談の場において、この課題はノルウェーの役割に対する強い支持とともに、マンモハン・シン首相からラージャパクサ大統領に伝えられた。

タミル・ナードゥ州とケーララ州の民間団体では、スリランカ難民の支援事業を進め、日本の NGO にも協力を求めている。インドとスリランカ政府が合意できれば、一時的にでも休戦を実現し、人道的な見地から食糧や医薬品をインドで買い付けて、孤立したジャフナ住民に届けたいと考えている。この際、南アジアに利害関係の少ないノルウェーよりも、経済関係の深い日本の役割のほうを受け入れられやすいという意見も強い。

インド政府の協力の下に、ナーガパティナムなどのインドの港から、米穀やダール豆などの食糧や医薬品を KKS 港やポイント・ピードロ港に送ろうという声は、スリランカ政府部内にも小さくない。この輸送に関しては、両国海軍が安全を保証するとしても、貨物船の用船が容易ではない。また、ジャフナ半島からコロンボなどに移動したいと希望する住民が1万2500名もいるので、貨物船だけでなく、旅客を輸送する高速フェリーも必要である。

2006年9月12日にブラッセルにて開催された東京会議の共同議長国会談では、スリランカ政府と LTTE の双方に対して、停戦協定を遵守し、話し合いによる解決を強く要請した。双方とも話し合いによる解決を目指している、と表明する点では一致している。しかし、10月第一週に設定したノルウェー代表の発表について、13日にスリランカ政府はノルウェーから何の相談も連絡も受けていない、一方的な会議設定だとの反論を公表した。

このように国内的にも国際的にも、事態は混迷を深めるばかりで、非軍事的な問題解決の目途は立っていない。しかし、戦乱による難民の生活破壊を眼の前にして、手を拱いているわけにもゆかない。スリランカ島の北端に位置するジャフナ半島は、住民の95パーセント以上がタミル人である。ほとんど全員がシンハラ人である陸海空軍の軍人と警察官約4万人が、治安の維持を担当している。日常的な行政には、タミル人の民間組織の協力が不可欠である。たいていのタミル人は、友人知人や親戚縁者が LTTE 支配地域にも住んでいる。個人的にも組織的にも、軍人や警察官と違って多様な交流がある。

2002年2月の停戦協定の締結から2006年夏までは、スリランカ政府と LTTE を代弁する組織との二重行政が、ジャフナの実情であった。各地の漁業協同組合事務所には、タミル・イーラムの旗やその指導者であるプラバカランの写真が飾られていたものである。コロンボでも、キリ

ノッチに本部を持つ NGO である TRO が、LTTE スリランカ内外の諸組織と連携しながら、事業活動を行っていた。

筆者が TRO のレッジー代表とコロomboで最後に会ったのは、2005年2月である。その日、本部のキリノッチからコロombo事務所に来たそうだ。その時私は、TRO の津波対策事業について話を聴いた。ノルウェーの外相が来たときに、漁村復興の援助について取り決めたそうだ。セイラン銀行のコテラーワラ頭取と会い、5%の低利資金援助を受け、TRO が利子補給して漁民には無償で貸すことにし、ワダ馬拉ッチやムラティヴで始めるという。JBIC から商業銀行を通じて低利資金を貸してもらえないか、聞いて欲しいと頼まれる。そのほか、ヴァヴニアに漁網工場、ヤマハ等の船外機組み立てなどを誘致したい。ジャフナとマンクラムに冷蔵倉庫を作れば、検問所の規制時間による魚の輸送困難を緩和できる。以上のような事業に、日本からの援助を期待するという。

そのあと訪問した復興省の M. S. ジャヤシンハ事務次官は、インド洋大津波の直前の12月25日に成田から帰国し、それ以来対応に忙殺されているという話だった。北東部出身の漁業部門担当者も議論に参加してくれる。セイラン銀行の低利融資事業については知らないが、漁船や漁具をローンで提供するプロジェクトも、無償で提供する事業と共存できるという返事だった。復興省でも津波支援の全体像がわかっていないようだ。このころは、キリノッチに本部を置く NGO もコロomboの政府部局も多元・多重の協力関係を持っていたものである。当時、LTTE と対立する立場から、シンハラ民衆の武装蜂起を組織したことのある JVP 本部に行き、ティルヴィン・シルヴァ書記長と話すと、津波復興支援に関しては、政治信条の違いを超えて協力したいという。津波被災を契機に、民族和解の道が開かれようとしていた。

2006年7月のムットゥール攻防戦後、ジャフナにおける政府軍と LTTE 軍の抗争が激化し、漁村の暮らしも大きく変わった。アジア太平洋資料センターのジャフナ事務所では、漁村復興の事業実施が困難になった。コロomboから定期航空便を運航している EXPO エアー社に行くと、予約は受け付けたものの、民間航空局からジャフナ空港の上陸許可が出るまで、飛ぶ見通しが立たないという。トリンコマリ空港なら4500ドルでチャーター便を飛ばすことができるし、利用する国際団体もあると言う。

PARC ジャフナ事務所の日本人スタッフの撤収を実現するためにも、現地に赴きたいが空路だけでなく、陸路も海路対決する両軍によって閉鎖されている。JBIC コロombo事務所の顧問をしているオースティン・フェルナンド前国防次官の助言を聞く。空軍機に乗せてもらってジャフナに行くことは可能だが、帰りの便の見通しが立たないという。死傷者をコロomboに運ぶのが、帰りの便の主要な任務になっている。スリジャヤワルダナ病院は、先週から一般患者は他病院に移ってもらい、軍人専用病院化しているそうだ。スリランカ外務省に行き、ダナパーラ大統領顧問に会う。陸軍や和平本部と連絡を取り、PARC スタッフをコロomboに空軍機で移送する方法を探してくれるという。パリハッカー外務次官が過労で倒れ、病院に検査に行っているの、代行しているアムヌガマ次官補（前日本大使）に会う。同氏は儀典長を兼任していて、外国人を

ジャフナの KKS 港からトリンコマリー港に船送する計画が進んでいると教えてくれる。

NGO の連合体である Consortium of Humanitarian Agencies のティアガラージャ専務理事に会う。ここは一見して、多くの政府機関以上に組織が機能している。事務所に入ったとたん、同氏の優れた経営能力に圧倒される思いになる。今回の戦闘再開がエスカレートして、ジャフナ半島の住民が食料や医薬品にもこと欠く暮らしになることを心配している。政府軍は東部州制圧を目指し、LTTE 軍はジャフナ市に北上すること目指し、双方とも住民の困窮を無視して軍事目標を優先しているのが心配だという。そのあと国際赤十字委員会コロンボ事務所に行き、引き揚げ方法について相談する。隣に LTTE の攻撃リスト第 1 位といわれる EPDP ダグラス・デーワナンダ委員長（社会事業担当相）の自宅があり、極度のの厳戒態勢がしかれている。国際赤十字事務所が把握している限りでは、現在ジャフナ在住外国人は 45 名で、そのうちの引き揚げ希望者を確定して KKS の港からコロンボへ船送する準備を進めている。船の確保や両軍からの安全保障が得られれば、戦闘状況を見ながら実施したいという。PARC の日本人スタッフが乗船できるように願う。

そこからコフワラにある National Peace Council に行く。整然とした CHA に比べると PARC 事務所似て雑然としている。代表の J. ペレーラや K. ロドリゴ（People's Action for Free and Fair Elections）と話す。ペレーラの意見では、今度の交戦で予期していた以上に、政府軍の装備は高度化され、軍事目標の空爆が正確に行われている。予期以上に、LTTE の軍力は弱くなっていてジャフナ半島の制圧は無理なようだ。事態は Undeclared war ⇒ Low intensity war ⇒ Limited war という順で進んでいて、全面戦争ではないがコロンボの経済活動の破壊に向かうかもしれないという。

2 タミル・ナードゥ州とスリランカ内戦

カトナヤカ空港から再び、インドのチェンナイ空港に飛ぶ。貯水システムの水利研究とインド側からのジャフナ住民支援の実情を知るのが目的である。まずマドラス大学に行く。知り合いの古い教授たちは、ほとんど退任している。地理学科長のシヴァニアナム教授に会う。彼も今年で退職し、あとは出身地の Tiruchchirappalli におけるカーヴェリ川北部農村の研究をしたいという。アールナードゥ・ヴェラーラ（カースト）の一員であり、スリランカに親戚が多く、先週もスリランカの親戚の結婚式に出席したという。コロンボからジャフナに救援物資を送る輸送路が、軍用以外は途絶えているので、緊急にナーガパティナム港からカンケサントゥライ港へ送る方法が、両国政府で検討されているという。可能ならば、PARC としてもジャフナ事務所に食糧を送りたいと伝える。もし公式に認められるようであれば、OXFARM で働いている息子とも相談して協力したいという。

午後、アダイヤールの MIDS へ行く。ここでも C. T. クリアン、A. ヴァイディアナダ、グーハなどの知人は死去したり、退職したりしていた。スリランカ研究を担当している Dr. V. J.

ジョーンに会う。ラジヴ・ガンディによるピース・アコードまでは、インドの政策は正しかったが、それを次の大使が壊してしまった。コロomboの MARGA Insititute で研究員をしていた1997年の経験から言えば、インドのスリランカ外交はシンハラ社会への関心を強くする必要があるという。双方の政治家のリーダーシップの欠如が最大の問題だというありふれた結論だった。下記の5点のワーキング・ペーパーを貰う。

- K. Kalpana, "The Shifting Trajectories in Microfinance Discourse: A critical reading of the Anti-Poverty Dimensions of Microfinance programmes", Working Paper No. 189, Madras Institute of Development Studies, June 2004.
- , "Microfinance-the Silver Bullet for Empowerment: Some Questios," Working Paper No. 191, Madras Institute of Development Studies, December 2004.
- K. Sivasubranian & R. Sakthivadivel, "Farm Level Land and Water Productivity in Tank Irrigation: Some Methodological Issues", Working Paper No. 194, Madras Institute of Development Studies, September 2005.
- M. Moench & S. Janakarajan, "Water Market, Commodity Chains and the Value of Water", Working Paper No. 172, Madras Institute of Development Studies, June 2002.
- S. Janakarajan, "Soled Agriculture and Spoiled Environment: Socio-Economic in Tamilnadu", Working Paper No. 175, Madras Institute of Development Studies, September 2002.
- A. Rajagopal & S. Janakarajan, "State in perplexity: The politics of water rights and system turnover in Tamil Nadu," Working Paper No. 171, Madras Institute of Development Studies, May 2002.

チェンナイ中央駅前の南インド鉄道本社に行きロックフォート急行の寝台車を予約する。あわせて Indian Airline 航空の事務所に行き、デリー便の予約とスリランカ往復便を仮に予約しておく。雨が降らないとチェンナイの日中はすさまじく暑い。涼しくなってから、雑踏するエグモール駅に行く。蚊が大量にいて、ずいぶん刺される。22時発のコインバトール行き急行が遅れたあたりで、テイルチラパリ・ジャンクション駅行きの Rockfort Express も約20分遅れて出発する。それでもインド鉄道の現況では、遅れた部類に入らない。チルチラパリ・ジャンクション駅に着いてから一休みして、Rockfort の近くにある St. Joseph College に行く。会うつもりだった F. L. アレキサンダー教授は、東大の経済学博士を取得したのち、チェンナイのロヨラ大学へ転職したという。兄の県警副本部長もチェンナイに移ったという。今回の調査協力は期待できそうにない。

コロomboに電話して、PARC スタッフがジャフナから船でトリンコマリー経由コロomboへ脱出できたことを知りホッとす。8月29日の朝刊 (Hindu) によれば、Tiruvanamalai 県にある12の難民収容所に3267名のスリランカタミル人が収容された、と県知事が発表した。世帯主に月額400ルピー、12歳以上の家族には一人当たり288ルピー、8歳から12歳までの児童には180ル

ピー、8歳未満の子供には90ルピーの手当てが支給される。

乗合バスで、バラディ・ダーサン大学に行く。ひどく混んだバスに約1時間揺られて、1982年に開設されたキャンパスに着く。アートレイヤ教授は、マドラスの IIT に来年2月まで出向していて留守だった。代わりに、当時スウェーデンの学者と農村調査を分担したという、女性学の N. マニメカライ教授に会う。MIDS の S. ジャナカラージャン教授と最貧困層（日に1食のみ）の共同研究をしたが、その報告書はまだもらっていないそうだ。環境問題の M. ラヴィチャンドラン教授から電話で、午後2時半から大学院生に講義をするように依頼される。N. マニメカライ教授も参加型研究について話してほしいという。過去に書いた文章を元にして、大急ぎで OHP シートとパワーポイントの準備をする。結局ノート型パソコンが使えず、パワーポイントは取りやめる。

昼食は、N. マニメカライ教授がご馳走してくれる。教室には、経済学だけではなく、社会学、社会福祉学、歴史学など社会科学系の大学院生が加わり、100名くらい入る教室が満席になる。質問は教員からが多く、学生には消化不良だったかもしれない。講師謝礼の代わりにテーブル・クロスを貰う。帰りは、バスでシュリランガムへ行く。道路の混雑振りはどの経路も深刻だ。教職員には専用バスが運行されているけれど、学生の通学は深刻で、一度着席すれば、老人にも席を譲りたくない状況が、通学バスに同乗するとよく解る。

翌日、米穀市場のあるマナチャナルールに行くが、かつて止宿していたガネーシャ宅を見つけることができなかった。オーマンドゥール村経由でプタナンパティ村に行く。ネール・メモリアル・カレッジのポンナンバラム学長はマレーシアに出かけていて留守だったが、代わりに長兄のムッカピライ・ガンディ氏が一時帰国していた（82歳）。村の小学校の校長も兼ね、英語教育に力を入れている。昼食をご馳走になりながら、17歳でプランテーション労働者として、マレー半島へ出稼ぎに渡った父親の思い出話を聞く。マナチャナルールのチダンバラム女子大学が、1997年に精米工場から転換したばかりなので訪ねるよう勧めてくれる。

アビニマンガラム村の人びとに会う。マーリアンマン・コーヴィルは改装されたが、小学校は昔のままだ。筆者が寄贈したベンチ、柱時計、採点結果などの書類を保管するロッカー等をいまだに使っている。ありがたい。ウェラドゥライ校長は村長（パンチャーヤト議長）になっている。カルナン（書記）は他村に転出し、ムンシフ（村の行政官）も隣村のプタナンパティ村の人が兼任している。村一番のお金持ちだったペリヤサーミは、4年前に死去したそうだ。村の雑貨屋の数は、今も4店と変わらない。25年前に通訳をしてくれたタンガウエルは BHE 公社に就職し、トルゲートに家を建てたそうだ。村には電話が100を超え、学校の給食を担当している妹が電話すると、コルコタに出張中だとの返事だった。かつて牛乳を届けてくれていたパッチャイ・アンマルは今も3頭の乳牛を飼い、当時のようにモールを振舞ってくれる。1967年に通訳だったバズルーラさんのことを良く覚えていて、懐かしそうに話す。アーディ・ドラヴィダ地位向上運動のリーダーだったムルハン先生には会えなかったが、今も教員を続けているそうだ。すべての家を1戸づつ訪ねたかったが、そうもゆかず再会を約して別れる。

帰途、マナチャナルールのチダンバラム女子大学（Chidambalam Pillai College for women）に立ち寄る。町で唯一の大学だそうだ。創設者のチダンバラム氏は、40年間続けた Krishna Rice Mill の精米施設が古くなったので、改装するくらいなら、思い切って需要の大きな高等教育に転換しよう、と判断したという。ムッタイアーというネール・メモリアル・カレッジの卒業生が図書館長をしていて、いろいろと説明してくれる。タミル・ナードゥ州では、男女共学は少ないそうだ。バラディダーサン大学院大学に所属しているが、数学、物理、IT、会計学などは、人気が高く、修士課程までおいている。この大学事務局が昔のかつての同業者である近くの精米工場も紹介してくれる。アビニマンガラム村のムルゲーシャン氏が事務員をしていて、一緒に来てくれる。

Sri Balasubramaniam Modern Rice Mill（精米所）

もっぱらパーボイルド・ライスを生産している。バラモンが常食するアンボイルド・ライスは、プドゥコタイ県の精米工場で生産している。この工場における従業員は約百名で、女6：男4の比率だ。平均賃金は、女性が日給50ルピー、男性が150ルピー。粳600袋（60 kg）を1単位として、3日間で水槽に浸し（約20時間）、90度の熱湯でボイルし、乾燥する。精米すると、300袋（7 kg）になる。燃料は50袋（50 kg）の粳殻である。100袋の粳米から約18袋の粳殻が取れる。副産物の、コメ糠や油も売れる。近隣のトリチイ市を初めとする近隣の米穀市場から卸売商人が買い付けに来るそうだ。精米1袋あたりの卸売価格は、下記の通りである。

Ponni-I：1250ルピー

Ponni-II：1200ルピー

サンバ：950ルピー

クルワイ：800ルピー

このあと、カーヴェリ川沿いにラールグディ、グランド・アニカット、タンジャウルを經由して、河口のナーガパティナムへ向かう。途中何度か停まって、川幅や水量を観察する。グランド・アニカットで最大規模に膨らんだ川幅が下流に行くに従い、細くなり20 m 位になる。運転手に聞くと、今は水量の多い時期で、11月以降3月まではほとんど水が流れなくなるという。海浜沿いには、津波の傷跡が残り、いまでも避難所生活をしている人がいる。

まず港の税関へ行く。開店休業状態で、誰も仕事をしていない。Assistant Commissioner 以下の主要幹部は、休暇を取っていない。アソーカン事務官が親切な人でいろいろと説明してくれる。Jaffna の KKS 港には、定期的にセメントを輸出する貨物船が通っているけど、内戦が激化した一月前くらいから停まっている。セメント以外の雑貨は、Tuticorn 港から小さな木造のワッラム船が運んでいる。しかしそれも、この1月は動いていない。

Mahallaripuram 港からもジャフナ半島への輸出が行われているので、そこのバスカー税関吏を紹介してくれる。札幌で4年間暮らし、数ヶ月前に帰国したそうだ。スリランカへの輸出再開や配船については、チェンナイ港の Custom House 本部で詳しく把握しているといって、S. ナ

ラヤーナン, Superintendent of Customs を紹介してくれたので、電話で話す。次に、港湾局へ行く。返事は同じで、船さえ動けば通常の手続きにしたがってジャフナに食糧を輸出できるという。近くの Asia Shipping Agency へ行く。内戦再開後、スリランカ海軍もしくは LTTE 海軍に攻撃される危険があり、用船できない状態だという。双方から安全を保証してもらえれば、貨物量に応じて船を送ることができる、ともいう。

県庁に行くと救援物資を送るという話は聴いているが、中央政府から文書で指示がない限り県庁としては何もできない。インド赤十字社か NGO 協議会に相談してみなさい、と住所を教えて勧めてくれる。Ms. A. ジョージ, NGO Cordination and Resources Centre, 31, Mahalakshmi Nagar, South Plapanni Cheemy は、ケーララ出身でジョーン・クリアンやヴィヴェカーナンダなど共通の知人が多かった。SIFFS のサテシュ・バーブは彼女の夫で、ケーララ州のトリヴァンドラムで働いている。チェンナイには OFERR というスリランカ・タミルの救援組織があり、そこに協力してもらうのが一番良いという話だった。

チェンナイ行きの特急バスに乗るため、9時半に新しいバス・スタンドに行くが、実際にバスが出発したのは11時だった。ウルトラ・デラックスのエアクーラー・バスと銘うっているが、扇風機が付いているだけだった。180 Km 走るのに9時間もかかる特急バスで、座っているだけでお尻が痛くなった。

その足で LOYOLA College に行く。上智大学の SJ ハウスに滞在し、日本インド貿易を研究したと A. G. レオナード神父に会う。日本では上智大から龍谷大学に移ったルベン・アビト教授と重なっていた時期もあったりして、ずいぶん時間を割いて話してくれる。外国へ出稼ぎに行く労働者（ハウス・メイド）の研究をしている副学長のザヴィエル・ウェーダム神父や、Tiruchirappalli St. Joseph College の事務局長のジョセフ神父も同席して、研究協力を約束してくれる。また、スリランカ難民の支援はイエズス会としても取り組んでいるので、難民支援は必ずしも OFERR だけに頼らなくても良いという。

次に OFERR 事務所に行く。津波被災者支援とスリランカ・タミルの難民支援事業とを、題材にする2本のDVDビデオを観る。揚水ポンプにまで利用している、太陽電池の活用が印象的だった。そのあと、実質的な代表をしている S. C. チャンドラハサン弁護士と話し合う。

カルナーニディ政権は、難民が急増している現況を打開するよう中央政府に求めている。インドとスリランカ政府が合意できれば、一時的にでも休戦を実現し、人道的な見地から食糧をインドで買い付けて孤立したジャフナ住民に届ける事業を国際社会が支援してほしいという。この際、南アジアに利害関係の少ないノルウェーよりも、経済関係の深い日本の役割のほうを受け入れられやすいという言い分だった。1983年以降まったくスリランカに帰国していないというのに、国内政治情勢の分析は、実に的確である。両国海軍が輸送船の安全確保について協力すれば、タミル・ナードゥにおける最も強硬なイーラム独立派である Vaiko 議員を通じて、LTTE に休戦を説得する道もある。

駐コロンボ N. セン大使の時代に、インドは JVP の反インド政策を改めてもらうよう努力し

たが、一定の成果を収めたものの、彼らが少数民族問題を軍事的に解決しようと政府軍への入隊戦術を採用し、パーキスタンや中国への軍事依存を強めようとしているのは困る、という。チャンドラハサンの議論はインド政府のスリランカ政策に近く、伝統的なジャフナ・ヴェララ知識人の目から観ると、正統派だといえよう。しかし、粗野で無教育の漁民主体の LTTE 指導部から観ると、軍事的な圧力無しに、シンハラ政権を譲歩させることは不可能だ、という反論となる。

翌日、Indian Airline 便で再びスリランカにもどるためチェンナイ空港へ行く。空港で待っている間に、OFERR 事務所から電話があり、旧知の A. カディルガマルが来ているという。懐かしい。アムネスティ・インターナショナルで働いているので、今回のスリランカ軍による Extra-judicial killing について、ジュネーブで開かれる国連人権理事会に訴えたいという。コロンボ空港で手配してくれるタクシーは、また値上げしていてバンバラピティヤのホテルまで1750ルピーだった。コロンボに戻った PARC スタッフに会い、ジャフナでの苦労話を聴く。

大統領府の S. ジャヤシンハ調整官と会い、B. ラージャパクサ政治顧問とどんな話をするか打ち合わせをする。NGO の立場から「スリランカ政府の国際的な信用を回復するには、北部州で孤立している住民に人道支援をすることだ」と提案する。

大統領の弟である Basil Rajapaksa 政治顧問は、開口一番、タミル・ナードゥ州でスリランカ政府の評判はどうか、批判点を教えてほしいという。主権国家でありながら、北東部州の自国民保護をしないばかりか、パーキスタンの軍事援助を頼りに、司法手続き無しに住民虐殺をしている点で、テロリストの LTTE と変わらない、という声が強い。現州政府は、LTTE を支持しないが難民急増を防ぐためにも、中央政府に対抗手段を求めることになるだろうと伝える。タミル・ナードゥ州に行った今回の難民は、まだ6千名に過ぎないとか、EU が騒いでいる17名の NGO 団体の死者に比べれば、LTTE に殺されたムスリム住民は10倍以上だとか反論しながらも、人道支援はスリランカ政府の望むところだ、という。

ナーガパティナムなどのインドの港から、食糧や医薬品を KKS 港やポイント・ピードロ港に送るのは、できたら12日の共同議長国会議前に実現したいという。机上の電話機を取り、インド大使と直接電話で話して、デリー訪問の謝辞とともに生活物資を船送することの可能性を聞く。インド政府としては、大量の米穀とダール豆をスリランカに運ばれると、地元の住民が困るかもしれないので、数量を検討させて欲しい。しかし、この2品目以外ならば、砂糖も含めてあらゆる生活必需品をスリランカに輸出してもよいという返事だった。

この輸送に関して、両国海軍が安全を保証するとしても、問題は船である。25年前に日本政府が円借款で供与した2隻の貨物船のうちマハボラ号は大きすぎて、接岸できない。小さいほうのムデイタ号は、前回の輸送にも使ったが、船足が遅く LTTE 海軍の攻撃を受けた。どこかで、40ノット以上の高速船を借りることはできないかという。とりわけ、ジャフナからコロンボなどに移動したいと届け出ている住民が1万2500名もいるので、貨物船だけでなく、人間を輸送する高速フェリーを2、3ヶ月間、用船できるところはないだろうかと聞く。戦闘海域なので難しい

が、調べてみましょうと返事する。実現するようなら、PTOMS に署名した National Development Ministry のジャヤシンハ事務次官か Essential Service Commissioner ダヤラトナに担当してもらうつもりだという。私なりに努力するが、輸送船の手当てがつかず、この企画は中断した。

再びチェンナイに行き、OFERR 事務所で相談する。スリランカ大統領府では、インドへ避難したスリランカ・タミル人の人数を約 6 千名と把握していると伝え、直ぐに 9 月 5 日現在で 12,400 名を超えたと反論する。OFFER もタミル・ナードゥ州政府と話し合い、私企業の船をチャーターするのが望ましいという結論になったそう。問題は費用だが、食糧や医薬品を購入できるだけの資金を日本で募金できる自信がないと伝える。スリランカからニマルカ・フェルナンド弁護士も来ていた。11 日から開かれるジュネーブの国連人権理事会に NGO として参加するそう。チャンドラハサンは、暗殺されたニラン・チルチェルヴァムとは 2 歳年上で、ニマルカの連れ合いのワスデーヴァ・ナーナヤッカカーラ NSSP 委員長とはロー・カレッジで同期だったという。双方で可能な道を模索しようと約束して別れる。夕食時に、旧友のローレンス・スレンドラから電話があり、アヒラン・カデルガマルと二人でホテルに会いに来る。チャンドラハサンが 1985 年にボストンから強制送還されたとき、同じ飛行機の隣席にいた思い出話をしてくれる。

3 ジャフナの食糧支援と養鶏事業

2007 年 4 月 23 日、久しぶりにジャフナを訪問することができた。EXPO 航空の乗客 14 名中、外国人は若い女性のユニセフ日本人スタッフと PARC の計 3 人だけだった。再開した PARC 事務所は、部屋や机の配置を新しく模様替えしていて、みんな生き生きと活動している。しかし、外国人職員がいないと国際 NGO としての認知がなく、軍部との折衝に苦勞するそう。仕事は 4 時 45 分までに終える。これより遅くなると、外出禁止令で拘留される心配がある。夜になると散発的に響く砲撃の音で、ときどき眼を覚ます。

泊っていた GTZ のゲストハウスで、守衛さんが「LTTE 空軍機によるジャフナ空港爆撃があった」と伝えてくれる。携帯電話がつかない。事件がおきると、軍の命令で送信できないようにするそう。8 時半に半信半疑のまま PARC 事務所に行くと、ウェブサイトのタミルネット、ロンドンの IBC 放送（ラジオ）、スリランカ国防省など複数の情報源から報道されている、と教えてくれる。しかし、その戦果については、区々である。政府軍側報道によれば、攻撃機は 1 機だけであり、それも空軍基地の手前で追い返したときに、落とされた爆弾が塹壕に落ち、6 名の兵士が負傷したのみという。LTTE 側では軍事目標に甚大な被害を与えたという。民間航空のアエロ・ランカ便がキャンセルされた。

地上電話は通じるので、日本大使館から何度か心配の電話がかかってくる。カライナガルの海軍基地で国際 NGO と海軍の連絡会議が予定されていたが、海軍の都合でキャンセルされたとの

連絡がある。ジョセフ氏も病気を押して来てくれたので、カライナガルに行く代わりに PRAC 事務所の会議日とする。午前中、対象地域の漁民に救援物資を届ける上での問題点など、前年度までの活動報告をしてもらう。漁民が海浜に出ることが許されるのは、午前8時から4時までにすぎない。それも漁労可能な地区が、その日ごとに限定される。漁民は、生計を立てる道がなく、政府と NGO の救援物資に頼っている状況だ。LTTE 支配地区のウドットゥライ村の女性リーダーが避難先のムラティヴからヴァヴニヤとトリンコマリーを経由して配送された郵便で、乾燥魚プロジェクトの活動を続けたいと伝えてきた手紙に励まされる。

午後は、今年度の事業計画の審議である。比較的漁労が容易なカライナガル島の AMBAL 漁協で乾燥魚加工を始める一方、ワダマラッチ・イーストでは漁業が再開できるまでの経済活動として、小規模の養鶏事業を始めたいとの提案をする。卵の販売が主たる目的だが、失敗しても鶏肉として販売できるので始めようと決定する。副所長が漁村女性を対象に50%だけ返済してもらうささやかなマイクロ・クレジット事業を提案する。PARC から資金を贈与し、それを資本金とする女性の信用組合を作ってもらうよう修正し、受け入れられる。

フォールート事務所に行き、ニコリン所長に日ごろの支援のお礼を言う。こよなくジャフナを愛する女性で、今後も PARC が撤退せず、ジャフナで活動が続けるのなら、全面的に協力するといってくれる。そのあと、外国人スタッフが4人もいる（カナダ、ケニア、米国とフィリッピン）非暴力平和隊も訪ねる。昨年8月以降、失踪事件が急増したそうだ。

UNDP の隣にあるジャフナ商工会議所長宅に行く。3年前には「もう戦闘がないだろうと改築しました」と話していたのに、戦闘再開を恐れてジャフナから転出したそうだ。帰りの路上で運良く、ジャフナ小規模工業会議所のプラナチャンドラン会長に会う。京都に来た商工業者の一人で、ビジネスは順調だという。午後7時直前の立ち話になってしまったが、できることがあればやりましょうという。

午前2時前後に大きな砲撃の音が5、6回響き目を覚ます。4時に起床する。6時に従業員が来て、コーヒーを入れてくれる。マナカドゥ村に向かう、陸軍憲兵と警察の合同監視所で止められる。入村許可を求めて待つ。その間に、漁民の女性4名と会い、養鶏事業について意見を聴く。4人とも否定的だった。仮設の避難所暮らしでは不可能だという。30世帯が移住して行っただけで、いまだに218世帯が避難所暮らしをしているという。われわれの入村については、ナーガルコーヴィルの部隊からパラリ司令部に旅券番号などを添えて、メッセージが送られた。しかし、文書で申請しなければ許可できないと言われ、あきらめて隣のトゥンバライ村に行く。漁業組合長は、チクングニヤ（はしか）で発熱がひどいと言っていたが、事務局長と一緒に会ってくれる。津波で家族を3名亡くし、自身も軍の有刺鉄線のため受けた傷跡を見せてくれる。彼らに、養鶏事業を始める可能性を聞く。約30世帯の女性世帯主を優先したいという返事だった。マナカドゥと違って、この村には多くの国際機関や NGO の支援が来ている。「ブルー・リボン・ホテル」という、津波後に開店したトゥンバライ村の料理店で昼食を取る。

事務所に戻ってから、漁協連合会へ行き、理事長のタワラトナム氏と事務局長とに会う。グル

ナガルにある魚網工場の設備が老朽化しているので、支援してもらえないかという。「JICAに聞いてみよう」と、提案書のコピーを貰う。宿舎ヘジャフナ大学の前学長であるバーラスンドラム・ピッライ教授（地理学）が来訪する。同教授は、Peace Council of Jaffna Peopleの会長をしていて、明日3時半にビショップ・ハウスで行う会議に漁業開発の話をしてくれないか、という。ジャフナの有識者の集まりで、県知事のガネーシュ氏もメンバーだという。なるべく参加しましょう、と返事する。

その夜も午前1時に、砲撃の音で起こされる。40連発のマルティ・バレル砲も使われる。3時から6時まで再度寝る。昨年8月以来、ジャフナ市民にとっては、砲弾の炸裂する音と外出禁止令とが日常化しているようだ。Fishery Inspectorのマヘーシュワランたちが迎えに来てくれ、カライナガル島へ行く。アジットは、海軍基地のある島のため、一定の漁労が許されているので、カラヴィラ乾燥魚事業を展開できる。特にアンバル漁協は、経営に優れた女性事務局長がいて成果を挙げている。海浜の建物の近くに二つの井戸があり、魚をさばくのに便利だ。

次にチュンディクラムのアライマハル漁港に行き、女性主世帯の養鶏事業を始める説明をする。PARCが、雛鳥、鳥かごなどの初期投資をして、卵と鶏肉による所得向上を図ろうという案である。ここでも30世帯くらいが参加してくれそうである。ついでに、村内のココナツ繊維のロープ生産や村大工の家内工業を見る。

3時半からビショップ・ハウスに行く。1868年にフランスの教会が立てた、ジャフナでは巨大な建物のひとつである。10名近いPeace Council of Jaffna Peopleが来ている。ヒンドゥ教の司祭もビショップの隣に座っていたが、仏教会の代表はいない。県知事のガネーシュ氏は、コロンボから戻らず欠席するとの連絡がある。軍事作戦が始まってから、米穀が1キロ80ルピー、卵が1個25ルピーというように、消費者物価がコロンボの2倍以上になった。国際社会がもっとスリランカ政府に圧力を加えて欲しい、という声が強かった。PARCの報告書にしたがって、ジャフナ水産振興計画について報告する。タワラトナム氏も来て、魚網工場への支援を呼びかけた。

夜、宿舎で世界食糧計画のチャールズ所長に会い、漁民への食糧支援をお願いする。4月から3ヶ月間、サムルディの3倍の支援をすることが決まったばかりだという。アエロ・ランカ便が欠航した場合、国連チャーター機に搭乗させてくれるようお願いする。

4時半に起床し、出発の準備をする。ティハガラージャ氏が来て、昨夜プタラム上空で複数のLTTE空軍機がコロンボ方面に飛ぶのが目撃され、カトナーヤカ空港のスリランカ空軍が迎撃したという。ラジオのスイッチを入れると、LTTE空軍機は爆弾を落とすことなく、ワンニーに戻ったと伝える。このため、一晩国際空港は閉鎖され、コロンボの街も電力供給を止めた。携帯電話もつながらない。午前9時になって、アエロ・ランカ便の欠航も確定する。

叔母の死で忌引きしていたダルマリಂಗム所長が復帰したというので、漁業事務所にお悔やみを言いに行く。WFPを訪ね、明朝の国連チャーター機に搭乗申請をする。幸い空席があり乗せてもらえそうだ。食糧援助予算担当者が、ジャフナ半島全域で3万2千人の漁民が支給対象になったと教えてくれる。

ワールド・ヴィジョン事務所に行く。ワダマラッチの海岸地帯に立ち入るために、どのような許可手続きが必要か教えてもらう。セーワランカ事務所にも行き、マイクロクレジットの経験など、今後の協力をお願いする。両団体とも、非常に好意的だった。GTZ ゲストハウスの向かい側に、SLMM の宿舎があり GTZ のように共同便所じゃないから、次回は泊まってください、とマネージャに声をかけられる。よく泊まる Pillaiyer-inn も客がなくて休業している状態だから、国際機関の宿舎も外部の利用者獲得に乗り出しているようだ。

4月29日、6時に出発の用意をする。7時15分に PARC の車で UNHCR へ行く。各国際機関から十数名の乗客が集まったところで空港へ行く。軍のチェックポイントでバスに乗り換える。窓やカーテンを開けることが許されず、しかも車内で30分以上待たされる。窓ガラスが黒色に塗られていて、サウナの中にいるような暑さだ。外気温は摂氏34度だったが、車内は優に50度越えるのではない。

待合室で退屈しのぎに空軍兵士と話していると、木曜日のスリランカ空軍の迎撃で LTTE の小型機の片方の翼に損傷を受けたので、修理が終わるまで1週間位は攻撃に出られないだろうとか、今夜のクリケット・ワールドカップの観戦に大統領がバルバドスへ出かけたので、LTTE もクリケット好きだからしばらく休戦してTVで観戦するのではないかと、などという。11時に離陸して、12時15分にラトマラーナに着く。荒木大使に電話して、3時に公邸へ報告に行くことにする。改築が終わったばかりの公邸で蜜豆をご馳走してもらいながら、ジャフナでの見聞を報告する。そのあと JICA の植嶋所長に会い、北東部州の支援に力を入れてくれるようお願いする。

コロomboの情報通によると、LTTE の企画開発局長のトゥイヤワンは、英国留学を終え、今は戦闘部隊に復帰しマンナールの部隊長だという。無口で精悍な風貌の彼は、初対面からいかにも軍人という印象だった。それを手始めに、LTTE の共通の知人の消息を聞く。政治部のスポークスマンだったスダ・マスターも戦場に配備されたそうだ。プリデーワンとともに几帳面に答えてくれる人柄は、行政官に相応しかった。レッジーやマランのような若者は、戦時への適応力が大きいかもしれない。しかし、タミル・セルヴァンやイレニーヤス・セルヴィンのような戦病者、シンナッパー・マスターのように戦場に不向きな人物もいる。それにしてもほぼ戦闘がなくなった2001年夏から6年近い歳月が経過している。2002年の停戦後、初めて TRO 事務所のレッジー代表を訪ねたときは、戦場から市民社会に駆け込んできた青年のように感じたものだが、いまやビジネスマンと呼ばれても不思議がないほど変貌している。彼らにとって、6年間の停戦は、後戻りできないほど大きな変化ではなかったのだろうか。

マヒンダ・ラージャパクサ大統領をはじめスリランカ政府高官百数十名が特別機に乗って、バルバドス島のクリケット世界大会の観戦に出かけた後、LTTE 空軍機が深夜のコロンボ空襲を行った。ホテルの窓から見ると、停電の暗闇にサーチライトが光り、高射砲を含む各種の砲弾が上空に向けて乱射される。午前3時過ぎにカトナーヤカ空港にいる PARC 共同代表の井上礼子さんから電話があり、国際便の出発が遅れているという。コロombo空襲は、1942年4月の日本帝国海軍南雲兵団が行ってから実に65年ぶりである。

2006年10月から、LTTE に反旗を翻したカルナ派の支援のもとに、政府軍は東部州 LTTE 支配地区に対する空爆と地上軍の進攻に踏み切った。戦線は拡大し2007年初には、スリランカ陸軍が停戦協定に定めた LTTE 支配地区をほぼ制圧した。デンマーク、フィンランドおよびスエーデンが離脱した停戦監視団は、その役割を縮小した。フランスの AFC 職員17名の銃殺に続き、東部大学の学長、国際赤十字委員会の職員（タミル人）などが誘拐されたり、司法手続きを無視して処刑されたりして、欧米を中心に国際的な非難が強まっている。

4 むすびにかえて

2007年10月刊の明石康著『戦争と平和の谷間で』（岩波書店）は、末尾に「排他的ナショナリズムの狂気」という節を置いている。明石は旧ユーゴスラヴィヤの政治家ジラスの言葉を引用して、排他的ナショナリズムの狂気によって「戦争が始まると、その遂行者はすべてのものの破壊を目指すことになり、戦争遂行そのものが唯一の価値になってしまう」と述べる。

スリランカ情勢がすべて、このような排他的ナショナリズムの狂気によって支配されていると言い切る気はない。しかし、陸海軍を中心にスリランカ政権ではシンハラ・ナショナリズムの狂気が蔓延し、軍事的な対決がエスカレートした。軍事境界線近くで暮らす多くの地域住民は、排他的ナショナリズムの狂気に恐れ慄いている。

とりわけ PARC が人道支援の事業を展開しているジャフナ半島では、住民の9割以上が少数民族のタミル人であり、駐屯している数万人の軍人と警察官は、ほぼ100%多数民族のシンハラ人によって構成される。長期化した内戦のため、タミル人世帯はたびたび移住を余儀なくされたり、国内や国外の難民となったりしている。そればかりではない。隣接する反政府軍の LTTE 支配地域に、親兄弟、配偶者、親戚縁者、学校や職場の知人が住んでいたりする。深夜、軍人や警察官が訪問し、その人たちについての情報提供を求める。断れば、身柄を拘束される。身分を明らかにしない、双方の特務機関員の訪問が、行方不明や殺人事件につながっているが、たいていの場合、犯人が検挙されることはない。PARC 事業を推進しているタミル人スタッフ、漁協関係者をはじめ、地域住民の恐怖感はいかばかりか。

10月後半に、南インドのタミルナードゥ州にあるジャフナ・タミル人の難民キャンプを訪問した。難民支援活動をしている OFERR（イーラム難民再定住機構）のチャンドラハサンによれば、2006年半ばから、新たに来る難民が急増したそうだ。タミル・ナードゥ州にある115難民キャンプに居住する人口は、2005年以前の旧難民が59,792名、それ以降の新難民が19,987名である。

この半年間、政府軍による東部州の制圧、LTTE のアヌラーダプラ空軍基地攻撃、空襲による LTTE のタミルチェルヴァン政治代表の爆死、軍事予算の増額等が続いた。本年12月のラージャパクサ大統領の訪日時に、最大援助国日本が、対話による解決を呼びかけている。

（受付 2007年12月24日）